

小説おはなはん 続印廃止

定価 二八〇円

昭和四十一年十二月五日印刷

昭和四十一年十二月十五日発行

著者 小野田 勇

カ
バ
I
題
字 島 田 し づ

印刷者 東銀座印刷出版KK

発行者 大 橋 恭 彦

発行所 映画芸術社

東京都中央区築地二の五
電話(五四二)一八七三
振替東京六三七九一

小説おはなはん

目次

樹に登る花嫁	7
お髭の中尉さん	28
春や春	54
結婚へ	83
オンドイマゲのオゴジヨ	104
東京の新居	122
向う三軒	143
両隣り	168

死ぬべからず

女ごころに咎ありや

幸せ不幸せ

序

あとがき

192

206

230

林 謙 一

小 野 田 勇

小説化に寄せて

おはなはんの長男

林 謙 一

世の中は、幸福な人ばかりが住んでいるわけではない。傍から見ても、これではたまるまい、と思える不運不幸に見舞われている人びともいる。

春の温かい土に芽吹いた木の苗も、氷雨にもたたかれ、風にも吹き倒され、雪もいただし水にその根を洗われることもある。しかし、いつか気付かないうちに、見事な枝を大空に延し、緑美しく根を大地に張って育ち、花を咲かせ実を結ぶ。人生も大自然の生物の「生きる履歴」となんら変るところはない。不幸は、不幸と思い悩むところにおおいかぶさってくる「黒いカビ」である。運は予告なしにやってくる。それが幸運な時もあれば、不運なこともある。そして、どちらも、何んの挨拶もせず過ぎ去っていく。過ぎ去

るものにとりすがって嘆いても何になろう。サッパリとあきらめて、右に倒されれば左に根をおろし、後ろに押されれば前へ一歩踏み出そう。

小説「おはなはん」はそれを教えている。モデルの林はなさんより遙かに男々しく、不幸を幸福えの糧とし、不運を笑顔で見送っている。明治、大正、昭和と揺れに揺れた三世代に、五つの戦乱戦争の中に生き、二十五歳で夫に先きだたれ、再婚をしりぞけ、二人の遺児を守り育てて成人させ、いま、静かで平和な、広々と、担々とした老後の秋の野を、花に頬を寄せ、鳥に耳を傾け、水に写る行く雲に思い出を托している。

小説「おはなはん」は、稀にみる小野田勇さんの才筆で、母を美化し、母に装おいを着せて世の「私は不幸と思い込んでいる人々」の三面鏡の中に立たせた。本人に「私はこれほどの者ではないのにねえ」と言わすまでに。

カバ―・題字

島田しづ

樹に登る花嫁

明治三十六年春。爛漫の桜花に祝福されて、まるで晴れあがった南国の空のように底抜けに明るい一生を送った女が、四国松山の学窓を巣立った。

浅尾はなである。

一口に県女といわれる松山高等女学校は、愛媛県唯一の県立女学校というので、名門の誇りも高く、厳格をもつて鳴る校風だが、そんな中にあっても、茶目で楽天家でお転婆のこの娘は、級友達は勿論、教師連中からも「おはなはん」という愛称で呼ばれ、親しまれてきた。愛くるしくはあったが、それほど美人ではない。どこにでもある平凡な娘なのである。だのに、彼女を見る者につい微笑を浮べさせてしまうような妙な魅力を持っていた。

今日の卒業式でもそうだ。県の名士連が来賓として居並び、教師達さえ改まった顔つきで気取っている晴れの席だというのに、おなはんはとんだ失敗をして、厳肅であるべき式場に笑

いを振りまいてしまった。

長い長い行事にあきてきたおはなはんは、隣りに坐っている親友の井原紀代とヒソヒソ話をはじめたのが、つつい夢中になり、泥鰌髭どじようひげの教頭先生が卒業証書を渡すべく、彼女の名を二度も繰返して呼んだのにまったく気がつかないのである。免状の授与は、当時としてははなはだ民主的に五十音順に行なわれたので、ア行の姓を持つおはなはんは一番はじめに呼ばれた訳だ。それが、まるで反応がないのだから格好のつかないことおびたらしい。

「浅尾はな！」

泥鰌髭どじかうひげの先を氣むづかしくふるわせながら、教頭が三度目に卒業式場にあるまじき大声を張り上げて、やっとおはなはんは氣がついた。

「ハイ！」

反射的に教頭の大声と対抗したかのような突拍子もない声で返事をし、勢いよく立ち上った。

その瞬間、おはなはんは世にも悲しげな顔をした。卒業の感激でも、別れの感傷でもない。ピリッという音を聞いたからである。

（神様！ 大したことありませんように）

心に念じながら恐る恐る見たが、神様は無情であつた。腰掛けに釘でも出ていたのか、海老茶の袴の脇が、膝上十センチのあたりまで大きくほころびていた。

万事休すの心境である。

だが、式場の眼という眼が一斉におはなはんに集まっている。

いつまでも立ちん坊をしている訳にはいかない。おはなはんは片手でピラピラする袴の破れを押え、静々と通路を進んだ。

壇上に校長がいかめしい顔をつくって待っている。おはなはんは正面の階段を上った。

校長がうやうやしく免状を差し出す。今はこれまで。おはなはんは思い切りよくサツと両手を上げて免状を受け取った。自然の成行きで袴の脇がペロリとあいた。

一段高い壇上のことである。誰の目にもはっきりわかった。ざわめきが起り、忍び笑いがひろがる。

せんぶりを十杯も飲んだような校長の視線を、まっすぐに受けとめたおはなはんは駄々ツ子のようにチョツと舌の先を見せて笑った。

その、なんとも人を引きつけずにはおかなない笑顔に、校長の渋い表情が思わずほころんだ。

おはなはんはすぐ大真面目な顔になり、悪びれることなく自分の席に戻った。

それだけのことだが、堅苦しく、その癖だれ気味だった式場に、年頃の娘の集まりらしい和やかな空気が流れた。怪俄の功名という形である。無論、おはなはんは計算づくで笑ってみせたのではない。自分でもどうしてそうしたのかわからずに、そうしてしまったのである。天衣無縫の魅力とでもいうのだろうか。

「厭ねエ、おはなはんいうたら。厳肅な卒業式にまでうちらを笑わせて……」

甘い涙で学窓に別れを告げようと期待していたのに、あの一件で泣きそこなってしまった感傷派の永井とみが、式が終ったあとの校庭でおはなはんはんに抗議めかしていった。

「フフフフ勘忍、勘忍」

「なにをあがいに夢中で喋べったの？」

「それがな、紀代ちゃんが突然重大な発表しよったもんやから」

「重大ってなんやの？」

噂の主の井原紀代が、おはなはんの口を封じようと飛びついて来た。

「いけん、いけんいうたらいけんて！」

「なんで？ 構わんやないの」

「いけんて！ 絶対いうたらいけんよ」

卒業したばかりのホヤホヤで、まだ女学生の気が抜けず、仲よし同士、手を取り合い、肩をぶつけ合つての他愛ない争いに、とみがしたり顔で割つて入った。

「わかつたー。うちはちゃんとわかつたよ、紀代ちゃんの発表つて、縁談じゃろがね」

凶星であつた。おはなはんはびっくりした顔でうなづいた。

「いやア当つた！　なんでわかつた？　それがな、お式は来月なんじゃと……親友のうちに今までこれッぽっちもいわんと、今日になつて、それも卒業式の真ッ最中にいい出したんじやもの、つい夢中になつてしまうたのが無理ないじゃろがね。でも、永井さん、頭ええのう。数学はさっぱりじゃつたけど」

「いやア！　ひどいわ」

さつきから黙つて三人のやりとりを眺めていた江島好江が、意味ありげな笑いを浮かべながら口をはさんだ。

「そら、永井さんはピンとくるの無理はないがね、自分もきまつとるんじゃけ」

おはなはんはまたびっくりした。

「なんや、永井さん、あんたもかいね？」

永井とみは照れ臭そうに、だが幾分得意顔で答えた。

「仕様がないのよ、子供の時から家同士できめとったんじゃけに」

「へーエ、許婚いいなうけやね。どんな人？」

「官吏、県庁へ勤めとるの。井原さんは？」

早くも女性の本能である対抗意識を匂わせながら、とみが訊ねた。

「商人……」

とだけしか答えぬ紀代に代っておはなはんが、

「ただの商人やないんよ。大街道おうちいどうの吉野屋のお内儀さんに納まるんじゃけ、立派なもんじやろがね」

「ヒヤー」

取り巻いていた女生徒達の間に、一種のどよめきが起こった。

吉野屋呉服店は、松山の目貫き通りである大街道で五本の指に入る豪商なのだ。羨望の声があがるのも無理はない。紀代の評判の美貌が買われての玉の輿であろう。

いつの世にも女にとって結婚の話題は絶対である。教室で開かれたお別れの茶話会の席でもその話で持ち切りで、その結果、同級生の内、すでに縁談のきまっている者が二十人近くもいることがわかった。

おはなはんには思いもよらないことだった。

「みんな早いんじゃないやね。お免状貰うて袴脱いだら、すぐお嫁さんになるんやね」

五月には海を渡って広島へ嫁入りするという鈴木のおはなはんの感慨をこともなげにしりぞけた。

「当り前じゃがね、うちら、もう十八やもん」

「そうじゃろかねエ、そがい之急いでお嫁に行ってしまうのはつまらんような気がする」

「おはなはんは、よう先生の目を盗んで小説本読んどったけに、大方恋愛に憧れとるんじゃないやろ」
万更、的外れの言葉でもない。おはなはんはくすぐったい思いでフフフと笑った。

その笑いをどう取ったのか、永井とみがさぐるような眼つきでいった。

「わからんよ、おはなはんのことじゃから。こがいにとぼけた顔しとって、実は大洲の家へ帰ったら、もうちゃんとお婿さんがきまつとる……なんていうのと違うかいね？」

おはなはんは澄まして答えた。

「はア、きまつとるよ」

「エエツ！」

まわりの連中が一斉に顔を向けた。学校中の人気者おはなはんの花婿がきまつているとあつ

ては、気になるのが当然である。

「まア、ずるい人。うちのこと怒っておいて、自分は黙っとったなんて……どんな人？　なア、教えて」

紀代の甘え声に、おはなはんはいたずらっぽい微笑で応えた。

「うちのお婿さんはな……」

わざと、うっとり夢みるような目つきをして見せてから、

「羽根の飾りのついた帽子をかぶり、黄金の剣を腰に、白い馬に乗って、うちを迎えに来るんだよ」

「剣を吊って馬に？　ほしたら、軍人さんかいの？」

紀代の当然の質問に、おはなはんはケロリと答えた。

「王子様や」

「え？」

「ホレ、お伽噺によう出てくるやろ。うち、子供の時からお婿さんは王子さまときめとるんじや」

「なんや、またおはなはんに一杯喰わされたわ」

ドツとあがる賑やかな笑声の中で、おはなはんは考えていた。

（うちの王子様は、どがいなお人じやろう？ 今どこにいて、なにをしとるのかしら？）

十八才の娘らしい甘い空想であった。旬日を経ずして、その人が目の前に現われようなどとは無論知る筈もなく――。

おはなはんは翌朝の舟で生れ故郷の伊予大洲へ発った。大洲は松山からわずか五十五軒、町の中央を横切る肱川の流れも、大洲富士と呼ばれ、字もまったく同じに書く富士山とみすやまのなだらかな山容も静かに美しく、伊予の小京都といわれる城下町である。今なら急行で松山からほんの一時間足らずのところだが、その頃はまだ汽車もなく、馬車で蜿々と山越えをするか、舟で伊予長浜へ出、そこからまた乗合馬車で肱川に沿ってさかのぼるかだった。が、いづれにしても一日がかりの行程だったので、県女に在学中は松山に住む叔母の家に寄宿していたのである。

父の平造は土地の旧家の当主で、小さいながら銀行を経営している。母のてると中学生の弟正太と、一家水入らずが久し振りに囲む祝いの膳は平和で楽しかった。

おはなはんを驚ろかす話は、その小さな祝宴の終りに平造の口から出た。